

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程3年 横田 悠矢

今回の派遣プログラムでは、ストラスブール大学日本語学科およびハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センターで両大学の修士課程を中心とする院生とワークショップを行うとともに、京都大学欧州拠点を訪れ、研究・教育活動の支援や大学の国際化推進について学ぶ機会を得た。ハイデルベルクに関しては他の報告書に譲り、以下ではストラスブールでの研修について報告する。

「人文社会学はどのようにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」をテーマとするワークショップは、中国の国内移住政策、日本における環境観と問題意識の文化表象、ドイツとベトナムでの環境に対する取り組みの相違、文学に見る環境あるいはネイチャーライティングの意義、洋上風力発電の普及拡大、エコロジーとヴィーガニズムなど多様な主題を扱うものだった。またディスカッションもさかんに行われ、繰り返し提示された論点のなかでも、文学研究・環境社会学・哲学など多分野に関わるエコロジー・スタディーズの前提には、人間対自然（動物）、都会対地方といった二元論自体を再考する余地とその必要性が認められるという主張が興味深かった。

欧州評議会では会議場見学のほか、第二次世界大戦直後の1949年に人権、民主主義、法の支配を促進するために国際機関が必要となった経緯、および主要組織（閣僚委員会、議員会議、欧州人権裁判所など）とその機能について説明を受けた。また質疑応答では、死刑制度の廃止、マイノリティーの保護、サイバー犯罪や人身取引への対策といった加盟国の協定や、日本を含めたオブザーバー国のステータス、ロシア・トルコ両国が拠出減額に至った背景の相違と前者に対する制裁といった近年の懸案事項など、多岐にわたる関連知識を得た。

さらに、アルザス地方博物館、ストラスブール市歴史博物館、ロアン宮内の考古学博物館・装飾博物館・美術館、中世・ルネサンス期の彫刻やストラスブール大聖堂の建築過程を展示・紹介したルーブル・ノートルダム美術館、近現代美術館など市内にある数多くの博物館・美術館を見学し、アルザス地方やストラスブールの歴史・社会・宗教・文化・習俗に関する理解をいっそう深めることができたのも、貴重な成果である。

一週間の研修を通して留学を前向きに検討するようになった、という参加者の声が多かったのは印象的である。今後も京都大学・大学院から多くの学生や院生が、交換留学制度や「京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻」を通じて、盛んな大学間交流に貢献してゆくことが強く期待される。